



Title	乳がん患者の罹患年齢別死因の検討
Author(s)	永安, 真弓
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/98752">https://hdl.handle.net/11094/98752</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 永 安 真 弓 )	
論文題 名	乳がん患者の罹患年齢別死因の検討
<p>論文内容の要旨</p> <p>【研究の背景】</p> <p>乳がんは女性にとって主要な死因の一つであり、高い生存率にもかかわらず、罹患後一定の割合で死亡し続けるという特徴がある。がんの予後に関する指標には生存率と死亡率があるが、これまでがん患者の死因については法律の制約により十分に検討できなかった。本研究において大阪府地域がん登録データベースからの罹患情報と、人口動態調査データベースからの死亡情報をリンケージさせたデータベースを用いて、がん患者の死因に着目した情報構築を目的とし、乳がん患者の罹患年齢別死因の特徴について2つの研究を行った。</p> <p>【研究1】乳がん患者の罹患年齢別死因の検討</p> <p>対象者は1985年から2006年の間に原発性乳がんと診断された女性患者40,690人、観察期間は10年で打ち切りとした。乳がん罹患年齢は全年齢、15-44歳、45-69歳、70歳以上に分類し、死因は全死亡、乳がん死、他がん死、非がん死に分類した。乳がん罹患年齢別に罹患後経過年数における、死亡ハザードの経時的な変化を評価した。40,690人の患者のうち13,676人（34%）が観察期間中に何らかの死因により死亡した。10年粗生存率は65.74%（95%信頼区間：65.28-66.21）であった。死因により分類した内訳は、乳がん死10,531人（77%）、他がん死1,048人（8%）、非がん死2,097人（15%）であった。累積死亡率は年齢階級が高くなるにつれ乳がん死が減少し、他がん死・非がん死が増加した。70歳以上の乳がん死の死亡ハザードは罹患直後が高くその後経過とともに減少したが、他がん死・非がん死の死亡ハザードは増加傾向であった。乳がん患者が一定の割合で死亡し続けるという傾向は、各死亡ハザードが複合した結果であり、加齢に伴う併存症や合併症、身体機能の低下に起因する疾患による死亡リスクの可能性が示唆された。</p> <p>【研究2】乳がん患者の罹患年齢及び臨床進展度別死因の検討</p> <p>研究1で用いた乳がん患者のデータベースをもとに、がんの罹患年齢及び臨床進展度（Localized限局/Regional領域/ Distant遠隔）による死因の検討を行った。がん罹患年齢別に罹患後経過年数における、死亡ハザードの経時的な変化を評価し、罹患年齢別臨床進展度別の乳がん死補正10年生存率を算出した（単位%（95% CI））。限局の15-44歳は90.49（89.51-91.39）、45-69歳91.35（90.83-91.84）、70歳以上90.03（88.87-91.07）、領域15-44歳65.53（63.66-67.33）、45-69歳66.09（65.07-67.09）、70歳以上63.14（60.60-65.57）、遠隔15-44歳12.77（9.27-16.86）、45-69歳11.77（10.10-13.58）、70歳以上12.67（9.20-16.71）であった。乳がん死では罹患年齢による有意差は認められなかった。年齢階級別臨床進展度別の死亡ハザードは年齢階級により傾向に違いがあり、乳がん患者が一定の割合で死亡し続けていたのは、70歳以上の限局と領域の非がん死が影響していると示唆された。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 永 安 真 弓 )			
論文審査担当者	(職)	氏 名	
	主 査	教授	遠藤 誠之
	副 査	教授	小泉 雅彦
	副 査	教授	上野 高義
	副 査	名誉教授	大野 ゆう子
<p><b>論文審査の結果の要旨</b></p> <p>乳がんは女性にとって主要な死因の一つであり、高い生存率にもかかわらず、罹患後一定の割合で死亡し続けるという特徴がある。がんの予後に関する指標に生存率や死亡率があるが、がん患者の死因については、法律の制約により十分に検討されていない。本研究は、大阪府地域がん登録データベースからの罹患情報と、人口動態調査データベースからの死亡情報をリンケージさせたデータベースを用いて、がん患者の死因に着目した情報構築を目的とし、乳がん患者の罹患年齢別死因の特徴について2つの研究を行った。</p> <p>本研究では、リンケージデータベースから乳がん女性67,335人を抽出し、このうち、罹患年1985年から2006年、死亡年1985年から2016年の女性乳がん患者40,690人を対象とした。</p> <p>研究1では、乳がん患者の罹患年齢別死因の検討を実施した。乳がん罹患年齢は全年齢、15-44歳、45-69歳、70歳以上に分類し、死因は全死亡、乳がん死、他がん死、非がん死に分類した。基礎的集計を実施し、乳がん罹患年齢別に罹患後10年間における死亡ハザードの経時的な変化を評価した。乳がん罹患後5年目以降の死亡には、高齢患者の他がん死および非がん死の影響が示唆され、また、高齢患者の非がん死には、併存症や循環器疾患・呼吸器疾患など加齢に伴う死因であることが示唆された。</p> <p>研究2では、乳がん患者の罹患年齢別及び臨床進展度別（Localized・Regional・Distant）の死因について検討した。罹患年齢別、臨床進展度別の10年補正生存率を算出し、乳がん罹患年齢別に罹患後10年間における死亡ハザードの経時的な変化を評価した。乳がん患者の罹患後5年目以降の死亡に影響を与えている死因は、乳がん死だけでなく、70歳以上のLocalizedとRegionalの非がん死による死亡の影響が示唆された。</p> <p>このように、乳がん患者の死因は、罹患年齢や罹患からの経過年数、臨床進展度によって異なる。乳がんのように罹患年齢層が幅広く、長期生存可能である患者の支援を考えるには、全年齢死亡の評価だけでは不十分であり、予後についての検討には罹患年齢とともに長期に亘る視点が必要であると考え。</p> <p>本研究の結果は、罹患患者数が増加傾向である乳がんの死因の指標として、公衆衛生の視点から鑑みても意味のある指標であると考え。したがって、乳がん患者の罹患年齢と罹患からの経過年数による詳細な死因について提供できる唯一の資料として、がん情報の構築に寄与できたと考える</p> <p>以上により、本論文の内容は、科学的・臨床的な価値があり、博士（保健学）の学位授与に値するものと考え</p>			